

現代の ことば

ジョン・グリーン

運動神経と平衡感覚がスポーツに欠かせないとよく言われる。筆者には正直にいつてどちらもありない。しかし、色々なスポーツをやったとき、英国のケンブリッジ大学では、冬はラグビー部、夏はボート部。パラシュート部にも所属。卒業後日本にきて、某大学空手部にも入った。英国に帰って、町の道場で古武道を長年たしなんだ。どのス

ポーツを試みても腕前は「普通以下」で、典型的な「下手の横好き」。体力と持続力だけで何とかやってこられた。筆者は現在、国際日本文化研究センター教授として、明治期の歴史を研究している。50代後半になった今でも体を動かさないと気がすまず、頭もすっきりしないし、研究が進まない。京都では、ジョギング(鴨川)、太極拳(北大

柔らのすすめ



路)とブラジリアン柔術(清水五条)をたしなむ。特に嵌まっているのは、柔術。柔術は、明治期の新聞等によく出てくる。明治27年夏のある夜、13歳の少年勝三が自宅に近いお寺に行く途中、3人の男に襲われた。勝三は、後ろから抱きすくめられ、「奇怪な挙動」をしようとする一人の男を前へ投げ、襲ってくるもう一人も「大地へ投げつ

けた」。その手並みをみた3人目は逃げた。富田新太郎のようには強盗など働く悪者の柔術家もいた。明治28年にその新太郎をやっと逮捕したのは、柔術が得意な巡査と牛乳配達のコンビだった。他に、女性柔術家も目立つ。おたかという婦人が泥棒の現場を押さえて「捨て身の手をかけて投げ出し」た。「柔術の心得もあり」という看護婦おいと、襲ってくる詐欺師金太郎を「早くも二、三回先へ投げつけた」とある。

この類の話が新聞に多く出るのは明治末期の1900年前後。嘉納治五郎も当然出てくる。柔術こそ外国の侮りから日本を守る力になる、と主張する。当時の柔術は、筆者の国、英国とも関係する。柔術師範の谷幸雄が英国に渡り、レスラーのジム・メラシーを2回も試合で破ったのが、1904年。上西貞一も渡英し、陸軍に柔術を指南するのはその翌年。前田光世という柔術家がちょうどこの時日本からアメリカに渡って、のちのブラジリアン柔術の種をまきはじめていた。

孫もいる筆者はブラジルで養われ、日本に逆輸入された柔術に今はすっかりはまっている。それは勝三、新太郎、おたか、おいと、前田光世らの柔術と同じものかどうか分らないが。夢中になる理由は色々ある。仲間は逞しいが、やさしい。指導がうまい、練習中音楽が流れるなど。他に、指導者を「さん付け」で呼ぶこと、力タがないためか新しい技がどんどん開発されること、怪我は(あまり)しないこと等等。練習の間、硬い自分がほぐれて柔らかい自分が時々みえてくる。そんなこんなで体がもつかり、自分は続ける。体がもたなくなれば、太極拳に専念する一方、対外文化交流のエピソードとしての柔術史を本に書く。読者の皆さん、道場ですっきりしませんか。(国際日本文化研究センター教授・日本史)